# 命をかけたニホンミツバチの逆襲劇！熱殺蜂球でスズメバチを撃退

釧路市医師会
市立釧路総合病院
森田　研（もりた　けん）

札幌の病院でハタラキバチとして働いている娘が、夜勤明けにSNSで猫の動画を送ってきます。人員不足で仕事が忙しくてストレスが溜まると、癒やしを求めて「猫休暇」で帰省する、といったサイクルです。２匹の猫も一日中遊んでもらえるので両者の癒やしです。

先日、いつもの猫動画ではなく、標題のサイトが送られてきました。若い養蜂家が本格的な巣箱作りや､はちみつの作り方などを上手に解説しています。女王バチを守りながら「分封蜂球」という塊を作って、新天地を求めて巣別れをする様子も。娘は爬虫類好きだったので「やれやれ次は昆虫か」と思いつつ、ついつい見入ってしまいました。ニホンミツバチが近くのスズメバチの巣からやってくる敵と戦うシーンが出てきます。

人間も蜂も、やっぱり戦争するんだよな～と思いながら見ていると、身体の大きいスズメバチを集団で取り囲み、数的優位で封じ込め、内部にいるスズメバチを「熱」で焼き殺すそうです！　何度も繰り返し出動したミツバチは、少しずつ「熱」の影響を受け、やがて死んでいきす。そして、そもそも出陣するミツバチは、高齢の順に、先頭に立って戦闘「熱殺蜂球」に積極的に参加するそうです。

はたと思い当たる数年前の光景……発熱外来が開設された頃、フルPPEを着用し前線で働いていた当院のニホンミツバチたちは、看護師長でした。「若者には別の前線である病棟やICU、手術室・カテ室を守ってもらう」と看護部が決めた師長輪番ルールでした。「年寄りはいろんなウイルスに暴露されているから、なかなか感染しないんだよね」と冗談を言っていた前院長も、ワクチン接種の出張接種や、職員ワクチン接種で自ら先頭に立ちました。当時、副院長だった自分は、院長が先に行ったので、後に続かないといけない雰囲気になりました。

そんな事を考えていたら、これは実は、あまり癒やしにはならない動画なのではないか？と思いましたので、娘に改めて聞いてみました。

「あれを会話とかなく、自然とやるミツバチたち、すごくない？　ヒトはさ､まだ死にたくない～とか、お前が行け～とかなりそうだなって」

**週末養蜂チャンネル**
https://www.youtube.com/@syumatsuyoho

# 最近の診療と研究で思うところ

北海道大学医師会
北海道大学病院
村松　憲（むらまつ　けん）

私は、北海道大学病院の皮膚科とその関連病院で2013年４月から働いております。後期研修からおよそ12年が経過しました。2021年から2023年まで海外に留学したため２年の期間があって変化を認識しやすいと思うのですが、帰国前後で明らかに入院患者の疾患が変化した印象があります。皮膚科の治療にも生物学的製剤が登場し、特に乾癬やアトピー性皮膚炎は重症例でも外来診療でコントロールすることが可能となりました。これにより乾癬とアトピー性皮膚炎の入院患者は留学前後でめっきり減少しています。代わりに、高齢化に伴って高齢者に好発する自己免疫性水疱症である水疱性類天疱瘡が増加しており、中等症から重症症例で皮膚科病棟の半分を占めるときもあります。この疾患は高齢者に内服ステロイド薬が必要となるため、５年の死亡率も高くなっています。私の研究と臨床の専門もまさにこの疾患であり、乾癬やアトピー性皮膚炎でも起きたステロイドに依存しない治療のブレークスルーを起こすために昼夜を問わず研究を行っています。

世界的なインフレ、円安と物価高は研究の世界にも影響を及ぼしています。研究のための物品は国内だけではなく海外製品も多くありますが、研究費の総額がほとんど変わらない中、値上がりで物品購入がしにくくなってきています。また海外学会も参加費、航空券代金も高騰しているため、中々参加できない状況です。ですが、Zoom会議を利用したりしてなんとか海外の研究者とも交流を維持するようにしています。また当科の腫瘍グループでは希少がん「乳房外パジェット病」に対するクラウドファンディングを成功させ必要な資金であれば、今までの枠組みにとらわれない方法で集めることも始めています。「北海道大学×READYFOR」として北海道大学全体で行っていますので（現在皮膚科は行っていませんが)、ご興味がある方はこちらにぜひ立ち寄ってみてください（https://readyfor.jp/pp/hokudai)。

いつの時代もその時代ごとの困難があって然るべきですので、若さを活かしてこれらの困難を楽しく乗り越えていきたいと思っています。